Japanese Association for Tibetan Studies

『パンタン目録』の研究

川越　英真

はじめに

チベット仏教前伝期の9世紀前半に編纂されたという3つの仏典目録の1つ『パンタン目録』(=目録『パンタンマ』) dKar chag 'Phang thang ma はこれまで現存しないといわれてきた。最近、中国チベット自治区ラサの西蔵博物館 (Bod ljongs rten rdzas bshams mdzod khang) に所蔵されるその写本を編集した、チベット活字本のテキストが北京から公刊された。この刊行本にもとづいた『パンタン目録』のテキスト研究として、典籍番号を割り当てたローマ字テキストとその注記等を付けた論考は別稿(1)で発表した。本稿はそれを受けて、『パンタン目録』の研究の一端として次の4点を検討する。

1.『パンタン目録』と『デンカル目録』との項目対照
2.『プトン仏教史』目録部に引用された『パンタン目録』
3.『大宝積経』に関する『パンタン目録』と『デンカル目録』との対応関係
4.『パンタン目録』の前書きについて

1　『パンタン目録』と『デンカル目録』との項目対照

『パンタン目録』の内容を分析する場合、有効な手段の1つとして『デンカル目録』(=目録『デンカルマ』) dKar chag lDan(/lHan)　dkar ma との比較対照がある。前伝期に編纂された3目録のうち、唯一チベット大蔵経に収蔵された『デンカル目録』は Lalou 1953 (=LL) と芳村 1974 (=YS) による目録自体の研究がある。そこで、『パンタン目録』全体の内容構成および『デンカル目録』との対応関係をみるために、両目録の分類項目を対比した表1を示す。

表1『パンタン目録』と『デンカル目録』との項目対照

項目	項目名
1	**般若波羅蜜等の経典の標題と巻数に関して、 般若経の排列 [KP.1-17]**
1	大乗経典、般若波羅蜜の部類に属するもの [LL/YS.1-16]
2	**大方広仏華厳経に属するもの [KP.18-22]**
2	大乗経典、方広経類に属するもの [LL.17-24/YS.17-23]
3	**大宝積経の部に属するものの排列 [KP.23-31]**
3	大乗経典、大宝積法門、十万品に属するもの [LL.25-72/YS.24-71]
4-1	**大経 (大乗経典)(2)の排列 [KP.32-45]**
4-1	種々の大乗経典、26巻以下11巻以上のもの [LL.73-84/YS.72-83]

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

4-2 4-2	**10 巻のもの ［KP.46-48］** 10 巻以下のもの ［LL.85-174/YS.84-173］(3)
4-3	**9 巻のもの ［KP.49］(4)**
4-4	**8 巻のもの ［KP.50-53］**
4-5	**7 巻のもの ［KP.54-62］**
4-6	**6 巻のもの ［KP.63-67］**
4-7	**5 巻のもの ［KP.68-76］**
4-8	**4 巻のもの ［KP.77-88］**
4-9	**3 巻のもの ［KP.89-109］**
4-10	**2 巻余のもの ［KP.110-113］**
4-11	**2 巻のもの ［KP.114-126］**
4-12	**1 巻半のもの ［KP.127-135］**
4-13	**1 巻余のもの ［KP.136-142］**
4-14	**1 巻のもの ［KP.143-161］**
5-1 4-3	**1 巻に満たない小部経典の排列 ［KP.162-171］** 巻未満のもの ［LL.175-202/YS.174-201］(5)
5-2	**200 頌のもの ［KP.172-180］**
5-3	**半巻のもの ［KP.181-188］**
5-4 4-4	**100 頌のもの ［KP.189-195］** 100 頌以下のもの ［LL.203-239/YS.202-238］(6)
5-5	**90 頌のもの ［KP.196-200］**
5-6	**80 頌のもの ［KP.201-202］**
5-7	**70 頌のもの ［KP.203-210］**
5-8	**60 頌のもの ［KP.211-213］**
5-9	**50 頌と 60（40）(7)頌のもの ［KP.214-215］**
5-10	**般若波羅蜜の小部経典 ［KP.216-219］**
5-11	**30 頌以下のもの ［KP.220-228］**
6 6	**漢語から翻訳された大乗経典の排列 ［KP.229-239］** 漢語から翻訳された大乗経典 ［LL.249-270/YS.248-270］
7 7	**小乗経典 ［KP.240-250］** 小乗経典 ［LL/YS.271-308］(8)
8 5	**大経に属するもの ［KP.251-260］** 大経に属するもの ［LL.240-248/YS.239-247］
9	**法門 ［KP.261-265］**
10	**小（小乗）(9)経典 ［KP.266-298］**
11 9	**真言タントラ ［KP.299-302］** 秘密真言タントラ ［LL/YS.316-328］
12	**大小の陀羅尼と個々の儀軌 ［KP.303-315］**
13 10	**五大陀羅尼［KP.316-320］** 五大陀羅尼 ［LL/YS.329-333］
14-1 11	**大小各種の陀羅尼 ［KP.321-325］** 大小各種の陀羅尼 ［LL.334-436/YS.334-437］(10)

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

14-2	**半巻のもの ［KP.326-328］**
14-3	**100 頌のもの ［KP.329-334］**
14-4	**80 頌のもの ［KP.335-339］**
14-5	**70 頌のもの ［KP.340］**
14-6	**60 頌のもの ［KP.341］**
14-7	**50 頌のもの ［KP.342-351］**
14-8	**40 頌以下のもの ［KP.352-358］**
14-9	**30 頌のもの ［KP.359-369］**
14-10	**20 頌のもの ［KP.370-379］**
14-11	**10 頌のもの ［KP.380-401］**
14-12	**9 頌のもの ［KP.402-409］**
15	**陀羅尼呪の心髄を別個に抽出したもの ［KP.410-418］**
16-1 12	**百八名、礼讃、吉祥、種々の誓願 ［KP.419-431］** 百八名 ［LL.437-445/YS.438-446］
16-2 15	**吉祥 ［KP.432-438］** 吉祥の法門 ［LL.476-482/YS.477-483］
16-3 14	**種々の誓願 ［KP.439-451］** 種々の誓願 ［LL 464-475/YS.465-476］
17 16	**律典関係 ［KP.452-470］** 律藏［LL.483-513/YS.484-513］
18 17	**種々の経典の注釈 ［KP.471-516］** 大乗経典の注釈 ［LL.514-564/YS.514-565］
19 18	**漢語から翻訳された経典の注釈 ［KP.517-523］** 漢語から翻訳された経典の注釈 ［LL.565-572/YS.566-573］
20 19	**中観の論典 ［KP.524-552］** 中観の論典 ［LL.573-605/YS.574-606］
21 21	**識の論典 ［KP.553-582］** 識の論典 ［LL.614-654/YS.615-648］
22 8 23	**小乗の論典 ［KP.583-597］** 論典 ［LL/YS.309-315］ 小乗論典 ［LL.686-694/YS.680-688］
23 24	**論理書関係 ［KP.598-625］** 論理書関係 ［LL.695-722/YS.689-716］
24 20 22	**個々の阿闍梨が著作された種々の論典 ［KP.626-650］** 禅定の書 ［LL.606-613/YS.607-614］ 種々の大乗論典 ［LL.655-685/YS.649-679］
25-1 13	**以前の阿闍梨、王たちが聖なるものを礼讃されたものの中で、礼讃 ［KP.651-665］** 種々の礼讃 ［LL.446-463/YS.447-464］
25-2 25	**チソンデツェン王御作の典籍 ［KP.666-675］** チソンデツェン王御作の典籍 ［LL.723-729/YS.717-723］
26-1 26	**翻訳された経典と論典のうち、大校閲が未だなされずに確定してないものと、翻訳途中として残されているものの中で、大校閲未了の経典と経典の注釈 ［KP.676-680］** 大校閲の未了の経典 ［LL.730/YS.724-725］

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

26-2	**翻訳中の経典と律典 [KP.681-691]**
26-3	**大校閲未了の論典 [KP.692]**
26-4 27	**翻訳中の論典 [KP.693-696]** 翻訳中の論典 [LL.731-736/YS.726-734] (11)
26-5	**翻訳中の論理書 [KP.697-699]**
27-1	**諸経典の標題が3本を対照して多少一致しないもので、2本の中に一致して出ているものを信用できるとして本文に入れた。1本の中に出て、(他の) 2本の中に出てないものを別個に記したもの [KP.700-704]**
27-2	**2種の旧本の中に出てなく、大徳シュンヌーニンポ本の中に出ているもの [KP.705-707]**
27-3	**他の訳記の中に述べられた経典の題目のうち、旧本の中に出て、2本の中に出ないもの、忍功徳、律部 [KP.708]**
27-4	**論典 [KP.709-710]**
27-5	**訳記の中に出てないが、安置される (典籍の) 題目 [KP.711-731]**
27-6	**陀羅尼 [KP.732-733]**
27-7	**阿闍梨らの御作 [KP.734-766]**
27-8	**経典ならびに論典の注釈、チソンデツェン王の御作 [KP.767-883]**
27-9	**真言の三門 [KP.884-959]**

表のゴチック体が『パンタン目録』で、角カッコ内は各項目に所属する典籍の分類番号(=KP) である。下段に『デンカル目録』の対応する項目名と典籍番号 (= LL/YS) とを並べた。ただし、『パンタン目録』項目24「個々の阿闍梨が著作された種々の論典」の中に、項目名の対応しない「禅定の書」を入れているのは、その項目名が『パンタン目録』にないけれども、所属典籍が対応するため便宜的に同じ項目に並べた。また、対応項目内の所属典籍は必ずしも相互に対応する典籍関係を意味しない。例えば、第3項目に「大宝積経部門」が共通して立てられるが、後述する『大宝積経』の各典籍の配置 (表3) からわかるように、『デンカル目録』の所属典籍は『パンタン目録』では数項目に散在して対応する。あるいは、『デンカル目録』項目4-2「10巻以下のもの」の所属典籍は、実際は『パンタン目録』の項目4-2「10巻のもの」から4-14「1巻のもの」までに記載される典籍と対応する関係にある。同様なことは、『パンタン目録』の他の細分化された項目でも共通する。こうした点から、両目録間の対応関係の分析には全典籍の対応関係も合わせて提示する必要がある。それは今後の課題であるが、あらまし調べたところでは、『デンカル目録』の全典籍、その中には重複記載もあるけれども、単純に典籍番号だけからいえばLLの736典、YSの734典中で、『パンタン目録』に対応が確認できないものが70典余りある。そのように、典籍の対応関係や項目の分け方と排列順などに相違点が見られるものの、両目録の全体の構成は基本的に類似しているといえるだろう。

したがって、従来『パンタン目録』は『デンカル目録』と異なり、カンギュル (仏説部) とテンギュル (論疏部) とに二分された最初のものと伝えられるという指摘がなされてきたが、現存写本の『パンタン目録』による限りではそういう構成になっていないことが明らかであるし、おそらく原本自体も同様であったと考えられる。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

ただ、ここで問題となるのは、『パンタン目録』の項目 27-1～27-9 の部分をどのように解釈すべきであるかということである。この部分は巻数や頌数の記載のない典籍が多く目に付く。また『デンカル目録』との関係では、その一部の典籍(12)がこの部分に対応関係が認められるものがある。しかし、項目 26-1～26-5 の大校閲未了と翻訳途中の典籍の後に続く部分であること、また『デンカル目録』が最後の項目の「翻訳途中の論典」で終わること、あるいは同種の項目の重複、一例をあげれば、項目 27-8「経典ならびに論典の注釈、チソンデツェン王の御作」のように、前の項目に経典の注釈やチソンデツェンの著作の項目があるにもかかわらず、同種の項目が立てられていること、等々を考えあわせると、『パンタン目録』のこの部分は目録が最初に作成された時点から存在していたのではなく、後に付加された増補部分ではなかろうかと推定される。仮にそれが事実としても、それがいつの時点であったかはわからない。あるいは最初の編纂時から間もなくして増補された可能性もあるが、遅くともその部分の典籍が『プトン目録』に引用されていることから（表 2 参照）、その目録の成立年代（1322 年）以前であったことは確かである。

2　『プトン仏教史』目録部に引用された『パンタン目録』

現存するチベット史料の中で、『パンタン目録』からの引用がもっとも多く見られるのは、いわゆる『プトン仏教史』の第 4 章「目録部」(13)（以下、『プトン目録』＝ NS）であろう。すなわち、『プトン目録』中の「世間の目となった聖なる法王方々と翻訳師らの御作の題目に関して」(14)と冒頭でいう部分（NS.2899-2953）と、それに続く「作者の御名が示されていないものに関して」(15)という部分（NS.2954-3047）とに列挙されるチベット人の著述は、引用末尾の「それら（の典籍）はほとんど目録『パンタンマ』の中に述べられる」(16)というものに相当する。そこで、その部分の典籍のうち、KP との対応関係が認められるものを表にして示せば、次のようである。

表 2　『プトン目録』に引用される『パンタンマ』と KP との典籍対応

NS	KP	NS	KP	NS	KP	NS	KP	NS	KP
2899	666	2931	812	2964	777	2994	809	3018	848
2900	667	2932	826	2965	782	2995	810	3019	849
2901	668	2933	827	2966	783	2996	811	3020	850
2902	669	2934	828	2967	784	2997	814	3021	851
2903	670	2935	841	2968	786	2998	815	3022	852
2904	671	2936	842	2969	788	2999	816	3023–24	853
2905	672	2937	868	2970	789	3000	817	3025–27	854
2906	673	2938	869	2971–73	790	3001	821	3028	855
2907	674	2939	871	2975	791	3002	824	3029	857
2908	675	2940	872	2976	792	3003	825	3030	858
2909	846	2941	873	2977	793	3004	829	3031	859

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

2913	820	2942	878	2978	794	3005	830	3032	860
2914	863	2947	470	2979	795	3006	832	3033	861
2916	817	2948	876	2980	797	3007	833	3034	862
2921	822	2950	874	2981	796	3008	835	3035	864
2922	823	2954	768	2982	798	3009	836	3036	865
2923	834	2955	769	2983	800	3010	837	3037	867
2924	870	2957	770	2987	802	3011	838	3038	875
2925	778	2958	771	2988	803	3012	839	3039	877
2926	779	2959	772	2989	804	3013	840	3040	879
2927	781	2960	773	2990	805	3014	843	3041	880
2928	785	2961	774	2991	806	3015	844	3042–43	881
2929	787	2962	775	2992	807	3016	845	3044–45	882
2930	801	2963	776	2993	808	3017	847	3046–47	883

この表中の NS. 2971-73, 3023-24, 3025-27, 3042-43, 3044-45, 3046-47 を KP ではそれぞれ 1 典(17)として典籍番号を割り当てているので、KP の番号付けに従えば、NS.2899-3047(18)の全 141 典中、KP と対応すると推定されるものは 120 典あり、対応が確認されないものが 21(19)典ある。

そして対応するものは、KP.470 が項目 17「律典関係」に属する以外は、項目 25-2「チソンデツェン王御作の典籍」と 27-8「経典ならびに論典の注釈、チソンデツェン王の御作」との 2 項目内に限定され、前者は KP の典籍の排列順に対応するが、後者は順不同である。

また、対応しない典籍があるのは、上に示した『プトン目録』の引用末尾の一文(20)から、チベット人の著述リストをまとめるための典拠として『パンタンマ』やテンギュル目録(21)とは別の目録が用いられ、それから引用されたことが考えられる。あるいはプトンの参照した『パンタンマ』と現存の写本 KP との間にテキストの相違があったのかもしれない。いずれにしても、プトンの利用した『パンタンマ』は KP の項目 27-8 を含む内容であったといえる。

ところで、『プトン目録』には、この引用以外にも『パンタンマ』が典拠とされた箇所が 5 ヵ所ある。それを個別に KP と対照して見てみよう。

1. 『プトン目録』はコータン語からの訳典について、「『パンタンマ』に、“Me 'gal 'tsho ba'i mdo” と “rTa mgrin bkod pa'i mdo” というコータン語から翻訳された（経典）があると説明される」(CBC, 154a)(22)と述べる。その 2 典の前者は KP.729 の “Mau dgal 'tsho ba'i mdo / bp./ ” に、後者は KP.730 の “rTa mgrin gnam sa bkod pa'i mdo / bp. /” に対応する。問題は、KP にはこの 2 典がコータン語からの翻訳と明示するような記載がないことである。ただ、KP.733 の典籍名の後に、「これらの経と陀羅尼は漢語とコータン語から訳された」(23)という記述が見られるが、「これらの経」の中にその両典が含まれるとしても、漢語からの翻訳か、コータン語からの翻訳かはテキストから判断することが出来ない。なお、両典は『デンカル目録』に対応がなく、『プトン目録』でも未入手経典であったようだ。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

2. 『プトン目録』は『十万頌般若広注』について、「“rGyal ba'i yum stong phrag brgya pa'i 'grel chen” 78 巻（=NS.499）[24]、少しばかり未訳のあるもの。本典は『パンタンマ』ではチソンデツェン王によって作られたと記されているけれども、以前の 2 目録にはインド本と説明されているので Damṣṭasena（/Damṣṭrasena）によって作られたものがこれである」（CBC, 156a）[25]と述べる。この『パンタンマ』の記載とは、KP の項目 27-8「経典ならびに論典の注釈、チソンデツェン王の著作されたもの」の筆頭に載る KP.767 の “ 'Phags pa shes rab kyi pha rol du phyin pa 'bum gyi rgya cher 'grel pa / bp. /”を指すと見られる。チソンデツェンの著作目録は、別に独立した項目 25-2 が立てられているが、それとは異なって、この項目のどれがチソンデツェンの著作かを特定するような記載[26]はない。したがって、プトンが何を根拠にそう述べたのかはっきりしない。
3. 『プトン目録』はハリバドラ作『現観荘厳論小注』Don gsal 5 巻（=NS.536）に関して、「目録『チンプマ』と『パンタンマ』とに、“mNgon par rtogs pa'i rgyan rgya cher 'grel pa” 6 巻と示されるのは、これが間違いであるのか、あるいは別のものがあるのか検討されるべきである」（CBC, 157a）[27]と述べ、『小注』の巻数の相違を問題にする。プトンのいう『パンタンマ』の 6 巻本とは、KP.473 の “mNgon par rtogs pa'i rgyan rgya cher 'grel / 6bp./ ”を指す。なお、『デンカルマ』LL/YS.517 は『プトン目録』と同じく 5 巻とする。
4. 『プトン目録』は『摂大乗論』の注釈書の作者について、「その（『摂大乗論』）初依である「所知依」（jñeyāśraya）の注釈 “Don gsang ba rnam par phye ba, 14bp.” (=NS.706)。これは目録『パンタンマ』に世親（Vasubandhu）作といわれる」（CBC, 161b）[28]と述べる。それに対応する典籍は KP.747 の “Shes bya'i gnas kyi ti ka slob dpon dByig gnyen gyis mdzad pa, bp. /”に確認できる。ちなみに、KP.747 に対応する『デンカル目録』LL.629/YS.623 では作者名を記さない。

   プトンが後に著した『テンギュル目録』では「これに関して、以前の目録に阿闍梨世親が作られたというものがあるが、そうではないらしい」（TKA, 102a-b）[29]と世親作を疑っている。この点は蔵経本［東北 4052：北京 5553］に跋文（mdzad byang）はないが、附属『テンギュル目録』（D.446a, P.124a）ではプトン『テンギュル目録』と同様に記される。
5. 『プトン目録』はコータン語からの訳典『八明と名づくる明呪』について、「このコータン語から訳された “sNang brgyad ces bya ba'i rig sngags”（= NS.1287）は『パンタンマ』に真正な経とされているけれども、検討されるべき事である」（CBC, 175a）[30]と述べる。この陀羅尼経典は KP.733 の “sNang brgyad ces bya ba'i rig sngags”に対応する。KP はこの典籍に続いて、上記 1 で示したように「これらの経と陀羅尼は漢語とコータン語から訳された」と記されているものの、先の例と同様に本典がコータン語からの訳典と解釈できる記載はない[31]。また、プトンが「真正な経とされる」というのは、目録に記載されていること自体を意味する

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

のかどうか真意がはっきりしない。

以上のように、プトンが利用した『パンタンマ』の典拠はすべてKPに対応する箇所が見出せるが、プトンの指摘するとおりには確認できない点もある。プトンが特にチベット人の著述リストのために『パンタンマ』を用いたのは、『デンカル目録』がチソンデツェンの著作リスト以外は、チベット人の著作(32)を少ししか記していないのに対し、より詳細な『パンタンマ』に資料的価値を認めていたからであろう。また、個々の事例において『パンタンマ』を典拠として用いたことに対しても同様のことがいえるであろう。

3 『大宝積経』に関する『パンタン目録』と『デンカル目録』との対応関係

『パンタン目録』と『デンカル目録』との対応関係で顕著な相違が見られるのは『大宝積経』である。両目録とも3番目の項目に『大宝積経』の部門が立てられている。『大宝積経』は個々の独立した内容を有する49の経典を集成したもので、漢訳本は菩提流志の訳編になる49会120巻が713年に成立した(33)。チベット語訳は大蔵経カンギュルの「宝積部」[東北45-93：北京760(1)–760(49)] に漢訳と一部順序が異なるが(34)、同様の49経が排列される。

『デンカル目録』は第46会『七百頌般若』(LL/YS.7) のみが項目1「般若経部類」に配置されるが、他の48経はすべて項目3「大宝積経部門」に記載される。その排列順も第13会 (LL.38/YS.37) と第14会 (LL.37/YS.36)、第41会 (LL.66/YS.65) と第42会 (LL.65/YS.64) の2ヵ所が逆である以外は漢訳と同一である。その点は『プトン目録』も同様であるが、第46会も「大宝積経部門」に入っているので、49経すべてがその部門 (=NS.128-176) に揃っている。

これに対して、『パンタン目録』における『大宝積経』の配置は、表3に示したように大きく異なる。すなわち、49経のうち第31会『恒河上優婆夷会』(LL.55/YS.54) の記載は確認できないが、残りの48経は項目3「大宝積経部門」に9経だけが登録され、他は項目1「般若経部類」、項目4・5「大乗経典部類」、項目26-2「翻訳途中の経典と律典」、項目27-5「訳記の中に出てないが、安置される（典籍の）題目」に散在している。この中で注目されるのは項目26-2「翻訳途中の経典と律典」中に記載される次の4典である。そのテキストを『デンカル目録』と対照して示そう。

1. [KP.683] 'Phags pa mngal du zhugs pa sgyur 'phro / bp. /
   [LL.38/YS.37] 'Phags pa mngal du 'jug pa bstan pa / 300sl.: 1bp. /（第13会『仏為阿難説処胎会』）
2. [KP.684] 'Phags pa mngal na gnas pa sgyur 'phro / bp. /
   [LL.37/YS.36] 'Phags pa mngal na gnas pa bstan pa / 600sl.: 2bp. /（第14会『仏説入胎蔵会』）

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

3. [KP.685] 'Phags pa go cha bkod pa sgyur 'phro / 6bp. /
[LL.31/YS.30] 'Phags pa go cha bkod pa / 1,800sl.: 6bp. / (第7会『被甲荘厳会』)
4. [KP.686] 'Phags pa 'od zer sgrub pa sgyur 'phro / 15bp. /(35)
[LL.35/YS.34] 'Phags pa 'od zer bsgrub pa / 1,500sl.: 5bp. / (第11会『出現光明会』)

この両目録の対照が正しいと仮定するならば、『デンカル目録』では49経すべてが訳了であったと見なせるのに対し、『パンタン目録』では翻訳途中の経典が登録されたといえるであろう(36)。また、『パンタン目録』では『大宝積経』所属の典籍が散在して記載されるのに対し、『デンカル目録』は第46会を除いて、他はすべて「大宝積経部門」に排列されていることや排列順の一致から、後の『プトン目録』やチベット大蔵経(37)へと継承される雛形になったのではないかと推定される。

表3 『大宝積経』に関する『パンタン目録』と『デンカル目録』との対応関係

項目	KP	デンカル目録	大宝積経	項目	KP	デンカル目録	大宝積経
1	7	LL/YS.7	第46会		123	LL.59/YS.58	第35会
3	23	LL.25/YS.24	第1会		124	LL.63/YS.62	第39会
	24	LL.68/YS.67	第44会		125	LL.71/YS.70	第48会
	25	LL.67/YS.66	第43会		126	LL.72/YS.71	第49会
	26	LL.47/YS.46	第23会	4-12	130	LL.57/YS.56	第33会
	27	LL.65/YS.64	第42会		131	LL.45/YS.44	第21会
	28	LL.48/YS.47	第24会		134	LL.33/YS.32	第9会
	29	LL.42/YS.41	第18会	4-14	153	LL.52/YS.51	第28会
	30	LL.49/YS.48	第25会		155	LL.51/YS.50	第27会
	31	LL.50/YS.49	第26会		157	LL.56/YS.55	第32会
4-1	34	LL.36/YS.35	第12会	5-1	165	LL.34/YS.33	第10会
	36	LL.40/YS.39	第16会	5-2	173	LL.69=186/YS.68=185	第45会
	44	LL.27/YS.26	第3会		176	LL.53/YS.52	第29会
4-7	68	LL.30/YS.29	第6会	5-3	184	LL.54/YS.53	第30会
4-8	83	LL.26/YS.25	第2会		185	LL.64/YS.63	第40会
	84	LL.60/YS.59	第36会		187	LL.58/YS.57	第34会
	85	LL.62/YS.61	第38会	5-7	203	LL.66/YS.65	第41会
	88	LL.39/YS.38	第15会	5-8	212	LL.61/YS.60	第37会
4-9	89	LL.29/YS.28	第5会	26-2	683	LL.38/YS.37	第13会
	91	LL.70/YS.69	第47会		684	LL.37/YS.36	第14会
	105	LL.46/YS.45	第22会		685	LL.31/YS.30	第7会
	106	LL.43/YS.42	第19会		686	LL.35/YS.34	第11会
	107	LL.28/YS.27	第4会	27-5	713	LL.41/YS.40	第17会
4-11	114	LL.32/YS.31	第8会		714	LL.44/YS.43	第20会

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

4 『パンタン目録』の前書きについて

『パンタン目録』は典籍目録の前後に前書きと後書きとが付けられている。その前書きの前半は冒頭の釈迦牟尼（Śākya thub pa）から始まって、阿難陀（Kun dga' bo）、龍樹（Klu sgrub）、弥勒（Byams pa）、無著（Thogs med）、世親（dByig gnyen）、陳那（Phyogs kyi glang po）、法称（Dharmakīrti）、寂護（Bodhisattva）、パドマサンバヴァ（Pad ma 'byung gnas）、ヴィマラミトラ（Vimalamitra）、カマラシーラ（Kamalaśīla）、和尚マハーヤーナ（Hwa shang Mahāyāna）、七仏（毘婆尸仏、尸棄仏、毘舎浮仏、拘留孫仏、拘那含牟尼仏、迦葉仏、釈迦牟尼仏）(38)、シャーンティガルバァ（Śāntigarbha）、ブッダグフャ（Sangs rgyas gsang ba）、シャーンティデーヴァ（Śāntideva）、チャンドラキールティ（Candrakīrti）(39)らの名前が連記されている。そして、これら諸仏、諸師らのうち弥勒以外の方々は出家者の姿をして大巻子本（Shog dril chen po）の上部に肖像画が描かれていると前書きは述べる。

また、後書きによれば、巻子本の下部にも同様な肖像画が描かれていると述べる。下部の肖像画に名前が記載されている者としてチベット人翻訳師ら８人、吐蕃王５人、インド人パンディタ３人の名前(40)が列挙され、吐蕃王５人と名前のない１人を除いて出家者の姿をして描かれているという。その後に、後書きは、「この目録は以前の大巻子本にあるとおりに記したので、非常に信頼できるものである」(41)と結ばれる。

こうした前書きや後書きの記述から、現存の写本は貝葉（dPe cha）の形態であるけれども、以前の形態、これはおそらく原本（Ma dpe）にまで遡ると思われるが、それは巻子本であったことが推定される。つまり、いつの時点かに巻子本から書写された時、巻子本の上部と下部とに描かれた肖像画に書き添えられた個々の名称が、前書きと後書きとに書き込まれたのではないかと考える。前書きは先の前半部分に続いて、後半部分は編者と編纂年代について次のように述べる。そのテキストと翻訳とを示そう。

> bod khams su dha rma theg pa che chung gi mdo sde dang / gzungs che phra dang / mdo sde'i ti ka dang / 'dul ba dang / bstan bcos che phra dang / bstan bcos kyi ti ka la sogs pa snga slad du bsgyur zhing zhu chen gtan la dbab pa'i mtshan dang / bam po dang / shu log gi grangs sgra sgyur pa na byang bu zhig mchis pa gtan la ma phab nas / slad kyis khyi lo la *btsan po Khri ral ba can Yar lungs shar phyogs kyi pho brang 'Phang thang ka med na bzhugs pa'i ston ces pa'ang snang* /(42) pho brang 'Phang thang na bzhugs pa'i ston / sgra sgyur gyi bla ban dhe dPal brtsegs dang / ban dhe Chos kyi snying po dang / lo tsa ba ban dhe De ben tra dang / ban dhe Lhun po la sogs pa'i g-yar sngar dha rma bsgyur zhing zhu chen bgyis pa'i mtshan byang rnying zhig mchis pas gzhi bzung ste / sgo sgo na mtshan byang mchis pa dang yang gtugs / dha rmar yang bstun nas / dha rma sde gcig la mtshan nyis rim du gyur pa yang phyung / sngar ma chud pa ci mchis pa bsnan nas / bod khams su dha rma bsgyur zhing zhu chen bgyis pa'i mtshan dang / bam po dang / shu log gi grangs gtan la phab ste dkar chag bla dper bris pa / / (KP, 2a)

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

チベット国において仏法である大小乗の経典、大小の陀羅尼、経典の注釈、律、大小の論典、論典の注釈等がたえず翻訳され、大校閲した典名と巻数と頌数とが、翻訳した時の標記として確定しなかった。後に、戌年のパンタン宮殿(43)にお住まいの時、[チ・レパチェン王がヤルルン東方のパンタンカメ宮殿にお住まいの時というものもある]、翻訳の師長大徳ペーツェクと大徳チューキーニンポと翻訳師大徳デーヴェンドラと大徳ルンポらの方々が、仏法を翻訳して大校閲した古い典名を基にして、部門ごとに典名とも対照し、仏法としても一致させて1つの仏法の部類において2つの題目があるものも除いた。そして、以前に（典名として）記入されていないものがあれば加えて、チベット国において仏法を翻訳して大校閲したその典名と巻数と頌数とを確定して目録の原本として記した。

この箇所は『パンタン目録』が仏典目録として作成された経緯を述べたものである。末尾の「目録の原本として」という記述から見て、おそらく原本自体に記された内容と思われる。また、目録の編者として諸種の大蔵経目録部や史書などに伝承されるものと同様のペーツェクら4人の名前があげられ、編纂年代としてこれまで知られなかった干支の「戌 khyi」年が記されている。

編者についていえば、その筆頭にあげられるカワ・ペーツェクは、Ka(/sKa) Cog Zhang という呼称で知られる若手の3人の大校閲翻訳師に選定されたうちの1人で(44)、他のルイギャツェン（Cog ro Klu'i rgyal mtshan)、イェシェデ（Zhang Ye shes sde）らと並んで、前伝期の仏典の訳業事業を担った中心人物である(45)。また、ルイワンポ（'Khon Klu'i dbang po)(46)と共に、『デンカル目録』を編纂したことでも知られる。彼の著作は『デンカル目録』に記録されてないが、『パンタン目録』には3典（KP.820, 826, 863）が見られる。2番目のチューキーニンポの人物像はわからない。3番目のデーヴェンドラは、いわゆる「試みの7人」Sad mi mi bdun 中にあげられる若者3人のうちの1人デーヴェンドララクシタ (rTsang Devendrarakṣita)(47)を指すであろう。翻訳師として彼の多くの訳業が蔵経本(48)に残されている。最後のルンポとは翻訳師ペーギールンポ（dPal gyi lhun po）を指す。彼はヴィドヤーカラプラバ（Vidyākaraprabha）やペーツェクらとの共訳が大蔵経(49)に収載されている。また KP.812『比尼波羅提木叉注釈』に記載される著者は、ペーギールンポが『律事』[東北1：北京1030]、『比丘尼律分別』[東北5：北京1034] という律典の翻訳を手掛けていることから同一者と見られる。人物像の不明なチューキーニンポを含めてこの4人はペーツェクを主幹とする『パンタン目録』の共編者であり、同時代に訳経等の仏教活動をした者たちである。

次に、「戌」年という編纂年代については、それを年代換算して確定できる根拠は前書きから得られない。その原因はパンタン宮殿に住んでいた王の名前が記入されていないからである。ただし、角カッコ内の写本に加筆された注記には、チ・レパチェン王、すなわちチツクデツェン Khri gtsug lde btsan（806生：在位815-841）の時代という説が示されるが、それが誰の手になる、いつごろの加筆かは知られない。他方、後のチベット史書類は前書き

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

に記されてない王名を加えて、逆に記されている干支が脱落して目録編纂について伝える。その伝承では先のレパチェンとする説と違って、レパチェンの父のセナレック Sad na legs つまり Khri lde srong btsan 王（776 生：在位 803-815）の代に編纂されたとするものが多い。その一例をナルタン版『カンギュル目録』から示せば、次のように述べる。

> チソンデツェンの御子ムティクツェンポまた（の名）はセナレックジンユン(50)の時代に、翻訳師カワ・ペーツェク、チューキニンポ、デーヴェンドラ、ペーギィールンポらが、パンタンカメの僧院に安置される諸経典の名称と巻数、品数、頌数を正確に確定して標題を記録した目録『パンタンマ』というものは、カンギュルを 1 つにまとめた最初である。あるものはこれ（『パンタンマ』）よりも『デンカルマ』の方が先（に編纂された）と主張する信じうることば（lung）もある。後に、カワ・ペーツェックとクン・ルイワンポらはトンタン・デンカルに安置される諸経典を編纂して目録『デンカルマ』を作られた（NKK, 24a）(51)

これと同様の記述は他にもあり(52)、それらもセナレックの代とすることは同じである。これに関して、824 年『デンカルマ』成立説(53)を主張する山口氏(54)は上の引用と類似する内容を載せる Vaiḍūrya g-ya' sel を典拠に、異なった時代の 2 人（セナレックとペーツェク）を同時代に示していること、また『デンカルマ』の中に『パンタンマ』の言及がないことを理由に、『パンタン目録』はセナレックではなく、チツクデツェン王の代に、『デンカル目録』より後に成立したという(55)。

いずれにしても、「戌」年はチツクデツェンすなわちレパチェンの代とみるならば 818 年か 830 年の 2 つしか該当しないし、セナレックの代とみるならば 806 年しかない。その中で山口氏の見解(56)に従うならば 830 年となるが、その場合の前提として『デンカル目録』が『パンタン目録』より先に成立したことが保証されなければならない。この点に関して、本論の 1 で触れた『デンカル目録』の多数の典籍が『パンタン目録』の中に確認されないこと、あるいは 3 で言及した『大宝積経』の典籍配置や翻訳途中の宝積経と律典が登録されていること、また『パンタン目録』には『デンカル目録』の存在を示唆するような記載がないことなどをどのように解釈すべきか問題は残る。今後、こうした点をふまえて、目録の前後関係や編纂年代の確定などが検討されなければならない。

略号一覧

CBC　Bu ston Rin chen grub (1290–1364). *Chos kyi 'byung gnas gsung rab rin po che'i mdzod.* In *The Collected Works of Bu ston.* Ed. Lokesh Chandra. Part. 24 (ya). (Śata-piṭaka series: Indo-Asian literatures. Vol. 64). New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1971.

D　Derge Edition（台北・南天書局出版本）

KGT　dPa' bo gTsug lag phreng ba (1504–1564/1566). *mKhas pa'i dga' ston.* Vol. ja. Ed. Lokesh Chandra. (Śata-piṭaka series: Indo-Asian literatures. Vol. 9-4). New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1962.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

KP *dKar chag 'Phang thang ma.* In *dKar chag 'phang thang ma; sGra sbyor bam po gnyis pa.*『旁塘目録；声明要領二巻』(Bod ljongs rten rdzas bshams mdzod khang gi rtsa che'i dpe rnying gces sgrig dpe tshogs. 西藏博物館古籍珍本叢書 1) 北京：民族出版社、2003、pp.1–67。

LL Lalou 1953.

NKK *dKar chag ngo mtshar bkod pa rgya mtsho'i lde mig.* (*Catalogue of the Narthang Kanjur.*). Rep. Lokesh Chandra. (Śata-piṭaka series: Indo-Asian literatures. Vol. 323). New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1983.

NS 西岡 1980; 1981; 1983.

P Peking Edition (鈴木学術財団出版本)

TKA Bu ston Rin chen grub (1290–1364). *bsTan 'gyur gyi dkar chag yid bshin nor bu dbang gi rgyal po'i phreng ba.* In *The Collected Works of Bu ston.* Ed. Lokesh Chandra. Part. 26 (la). (Śata-piṭaka series: Indo-Asian literatures. Vol. 66). New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1971.

YS 芳村 1974.

東北 宇井伯寿他編『西蔵大蔵経総目録』1934 (rep.1970).

北京 西蔵大蔵経研究会編『西蔵大蔵経総目録・索引』1961 (rep.1985).

文献表

Lalou, M.

1953 "Les textes bouddhiques au temps du roi Khri-sroṅ-lde-bcan." *Journal Asiatique.* 241, pp.313-353.

Tucci, G.

1958 *Minor Buddhist Texts.* Part 2. Roma.

Vostrikov, A.I.

1970 *Tibetan Historical Literature.* Calcutta.

桜部文鏡

1930 「西蔵訳大宝積経の研究」『大谷学報』11–3、pp.134–175。

西岡祖秀

1980 「『プトゥン仏教史』目録部索引 1」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』4、pp.61–92。

1981 「『プトゥン仏教史』目録部索引 2」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』5、pp.43–93。

1983 「『プトゥン仏教史』目録部索引 3」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』6、pp.47–200。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

羽田野伯猷

1968　「チベットの仏教受容の条件と変容の原理の一側面」『東北大学日本文化研究所研究報告』4、pp.1–153。

1983　「チベット流伝前期の王室仏教備考」『中川善教博士頌徳記念論集 仏教と文化』同朋舎出版、pp.281–312。

原田覚

1982　「lDan dkar ma 目録考」『仏教教理の研究』春秋社、pp.607–617。

1985　「吐蕃訳経史」『講座敦煌 6　敦煌胡語文献』大東出版社、pp.419–448。

山口瑞鳳

1982　「吐蕃王国仏教史年代考」『成田山仏教研究所紀要』3、pp.1–52。

1985　「『デンカルマ』824 年成立説」『成田山仏教研究所紀要』9、pp.1–61。

1995　「ダルマ王の『破仏』は虚構」『成田山仏教研究所紀要』18、pp.1–30。

芳村修基

1974　「The Denkar-ma」『インド大乗仏教思想研究』百華苑、pp.99–199.（初出 1950）

注

(1) 『dKar chag 'Phang thang ma』東北インド・チベット研究会、2005 年 5 月刊行。

(2) テキストの「大経」mDo chen po は登録された典籍および『デンカル目録』との対応関係から「大乗経典」を意味すると解釈した。この項目名は 4-1 から 5-11 までを総称する。

(3) 『デンカル目録』は項目 4-2「10 巻以下のもの」の中に，10 巻以下 1 巻以上の典籍を包括するのに対し，『パンタン目録』では項目を 4-2「10 巻のもの」から 4-14「1 巻のもの」までに細分して分類する。

(4) この項目は KP 出版本の編者が立てたことを示す記号がテキストに付けられている。

(5) 『デンカル目録』項目 4-3「巻未満のもの」は，『パンタン目録』の項目 5-1〜5-3 の典籍と対応する。

(6) 『デンカル目録』項目 4-4「100 頌以下のもの」は，『パンタン目録』の項目 5-4〜5-11 の典籍と対応する。

(7) テキストの drug bcu（60）は bzhi bcu（40）の誤記と解釈した。

(8) 『デンカル目録』の小乗経典［LL/YS.271-308］は，『パンタン目録』の項目 7「小乗経典」と項目 10「小（小乗）経典」の両項目の典籍と対応する。

(9) 「小経典」mDo phra mo は小乗経典を意味すると解釈した。

(10) 『デンカル目録』項目 11「大小種々の陀羅尼」の典籍は，『パンタン目録』項目 12「大小の陀羅尼と個々の儀軌」および項目 14-1〜14-12 と 15 の典籍と対応する。

(11) この項目に属する論典は『パンタン目録』項目 26-3, 26-4, 26-5 の 3 項目の論典に対応する。

(12) 『大宝積経』関係は表 3 で示したので省略する。その他の対応が推定される典籍番号のみを示

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

す。[KP.708] = [LL/YS.496], [KP.716] = [LL/YS.266], [KP.721] = [LL/YS.281], [KP.727] = [LL.264/YS.263], [KP.731] = [LL/YS.269], [KP.740] = [LL.677/YS.671], [KP.744] = [LL.679/YS.673], [KP.746] = [LL.608/YS. 609], [KP.767] = [LL/YS.514], [KP.780] = [LL.563/YS.564], [KP.889] = [LL/YS.323], [KP.894] = [LL/YS.318], [KP.899] = [LL/YS.317], [KP.900] = [LL/YS.316], [KP.904] = [LL/YS.325], [KP.906] = [LL/YS.326]

(13) CBC, 143a-210a. 目録部の研究は西岡 1980/81/83 を参照。

(14) 'jig rten gyi mig tu gyur pa'i chos rgyal dam pa rnams dang / lo tsā ba chen po rnams kyi mdzad byang la. (CBC, 206b).

(15) mdzad pa po'i mtshan ma smos pa la. (CBC, 207b).

(16) de dag phal cher dkar chag 'phang thang mar smos so. (CBC, 209a)

(17) 例えば，KP.790: rTen cing 'brel bar 'byung ba'i snying po'i bskyud byang sna gsum は NS. 2971-73 の 3 典に数えられる。他も同様である。

(18) NS は全 149 典と数える。なお，羽田野 1968, pp.53-59 は 147 典と数える。

(19) NS.2910-2912, 2915, 2917-2920, 2943-2946, 2949, 2951-2953, 2956, 2974, 2984-2986.

(20) 注 16 を参照。

(21) 羽田野 1968, pp.59-60 はナルタンの古テンギュル目録からの引用であろうという 13 典が示される。cf.NS.3048-3060 (CBC, 209a).

(22) 'phang thang mar / me 'gal 'tsho ba'i mdo / rta mgrin gnam sa bkod pa'i mdo zhes pa li las bsgyur ba yod par bshad de. (CBC, 154a)

(23) mdo dang gzungs 'di rnams rgya dang li las bsgyur /

(24) NS.499 は『デンカル目録』LL/YS.514、蔵経本［東北 3807：北京 5205］に対応する。

(25) rgyal ba'i yum stong phrag brgya pa'i 'grel chen bam po bdun cu rtsa brgyad cung zad ma 'gyur ba / 'di 'phang thang mar btsan po khri srong lde btsan gyis byas par bris mod kyi dkar chag gong ma gnyis su rgya gar mar bshad pas daṃṣṭa se nas byas pa de yin no / / (CBC, 156a). ちなみに、KGT, ja.124b は Kun mkhyen bu すなわちプトンの説明として同一の箇所を引用するが、プトンが「以前の 2 目録」というところを、『チンプマ』と『デンカルマ』という具体名を書き加えている。

(26) ただし，KP.841 の lHa btsan po という作者名はチソンデツェン王を指すと推定される。

(27) dkar chag mchims phu ma dang 'phang thang mar mngon par rtogs pa'i rgyan rgya cher 'grel pa bam po drug ces 'byung ba de 'di la 'khrul lam gzhan yod brtag par bya'o / / (CBC, 157a)

(28) de'i gnas dang po shes bya'i gnas kyi bshad sbyar don gsang ba rnam par phye ba bam po bcu bzhi / 'di dkar chag 'phang thang mar dbyig gnyen gyis mdzad zer / (CBC, 161b)

(29) 'di la sngon gyi dkar chag la / slob dpon dbyig gnyen gyis mdzad zer snang ste / ming pa 'dra'o. (TKA, 102a-b)

(30) snang brgyad ces bya ba'i rig sngags li las bsgyur ba 'di 'phang thang mar bka' yang dag tu mdzad mod kyi brtag pa'i gzhi'o / / (CBC, 175a). cf.NS.1287.

(31) 蔵経本［東北 1067：北京 693］に対応すると見られるが，その奥書には何語からの翻訳かは記されない。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

(32) Klu'i rgyal mtshan (LL/YS.531), Ye shes sde (LL.563/YS.564, LL.564/YS.565, LL.680/YS.674), Vairocanarakṣita (LL.671/YS.665)

(33) 桜部 1930, p.135.

(34) デルゲ版は東北 No.57（第 14 会）と 58（第 13 会）、85（第 42 会）と 86（第 41 会）の 2 ヵ所が漢訳の順序と逆である。北京版は北京 No.760（17）（第 18 会）と 760（18）（第 17 会）、760（41）（第 42 会）と 760（42）（第 41 会）、760（44）（第 45 会）と 760（45）（第 44 会）の 3 ヵ所が逆である。なお，チベット蔵経本に関しては桜部 1930, pp.149-169 を参照。

(35) KP の巻数が誤記でないとすれば、両者の分量が違いすぎる。NS.138、蔵経本は『デンカル目録』と同じ 5 巻とする。

(36) 同様な事例は他にもある。例えば、『デンカル目録』項目 16「律蔵」は訳了と見なせるが、対応が推定される『パンタン目録』の典籍は項目 26-2「翻訳途中の経典と律典」の中に記載される。それを対照して示せば、次のようである。

1. [KP.687] 'Dul ba gzhung bla ma'i sgyur 'phro / 54bp./
   [LL.486/YS.487] 'Dul ba gzhung bla ma / 16,200sl.: 54bp./ [東北 7：北京 1037]
2. [KP.688] 'Dul ba phran tshegs sgyur 'phro /
   [LL.485/YS.486] 'Dul ba phran tshegs kyi gzhi / 24,600sl.: 42bp./ [東北 6：北京 1035]
3. [KP.689] 'Dul ba gzhi rgya cher 'grel pa sgyur 'phro / 11bp./
   [LL/YS.494] 'Dul ba gzhi'i rgya cher 'grel pa / 3,300sl.: 11bp./ [東北 4113：北京 5615]
4. [KP.690] 'Dul ba gzhung bla ma'i 'grel pa sgyur 'phro /
   [LL/YS.497] 'Dul ba gzhung bla ma'i rgya cher 'grel pa / 6,000sl.: 20bp./ [東北 4116：北京 5618]
5. [KP.691] dGe slong ma'i 'dul ba rnam par 'byed pa sgyur 'phro / 28bp./
   [LL.488/YS.489] dGe slong ma'i 'dul ba rnam par 'byed pa / 7,400sl.: 24bp.+200sl./ [東北 5：北京 1034]

(37) デルゲ版の排列順は『デンカル目録』、『プトン目録』と一致する。

(38) テキストに加筆された注記には、「それら七仏の前に、名前の記載のないパンディタが数名（描かれて）ある」という。

(39) テキストに加筆された注記には、「この者（Candrakīrti）の後に名前の記載ない 3 人のパンディタが（描かれて）ある」という。

(40) 記載順に名前を示せば、次のとおり。dBa' Ye shes dbang po, 'Ba' [dBa']Khri bzher sang shi ta, sBrang rGya ra legs gzigs, Ngan lam rGyal ba mchog dbyangs, dPa' khor Vairocana, sNubs Nam mkha' snying po, lHa tho de snyan btsan, Srong btsan sgam po, Khri srong lde btsan, Khri lde srong btsan, Khri gtsug lde btsan Ral pa can, Surendrabodhi, Cog ku Klu'i rgyal mtshan, Jinamitra, sKa ba dPal brtsegs, Munivarman, Ye shes sde.

(41) dkar chag 'di ni sngon gyi shog dril chen po na 'dug pa ji lta ba bzhin du bris pas shin tu yid ches pa lags so / / / / (KP, 27a)

(42) イタリック体は写本テキストに赤字で加筆された注記を示す。KP ではそれを小活字で表示する。

(43) パンタン宮殿は 8 世紀前半のチデツクツェン（Khri lde gtsug btsan）の代に造営された（CBC,125a; KGT, ja.70b)。張怡蓀主編『蔵漢大辞典』p.1778 によれば、'Phang thang は

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

「西蔵自治区乃東県頗章区古名」と説明する。乃東県（sNe gdong rdzong）はロカ（lHo kha、山南）13 県の 1 つで、頗章区（Pho brang chus）はロカの都ツェタン（rTse thang）から約 20Km 南に下った地区である。

(44) cf.KGT, ja.125a.

(45) ペーツェク、ルイギャツェン、イェシェデらの著作、訳経等については原田 1985 を参照。

(46) ルイワンポは「試みの 7 人」中の若年の 1 人に数えられ（CBC, 127a）、大校閲翻訳師（Zhu chen gyi lo tsā ba）に選定された 9 人中では中年の 3 人中の 1 人にあげられる（KGT, ja.125a）。

(47) cf.CBC, 127a.

(48) ［東北 269：北京 935］［東北 274：北京 940］［東北 328：北京 994］［東北 507=883：北京 141=508］［東北 4060：北京 5561］［東北 4061：北京 5562］［東北 4062：北京 5563］［東北 4069：北京 5570］［東北 4071：北京 5572］［東北 4124：北京 5626］［東北 4125：北京 5627］［東北 4179：北京 5679］

(49) ［東北 1：北京 1030］［東北 5：北京 1034］［東北 157：北京 824］［東北 222：北京 888］［東北 506=885：北京 138=510］

(50) ここではムティクツェンポとセナレックとを同一視する。同様の説を示すものについては、山口 1978, p.14 参照。

(51) Khri srong lde btsan gyi lha sras Mu tig btsan po'am Sad na legs mjing yon gyi dus su lo tsā ba Ka ba dPa rtsegs / Chos kyi snying po / De wenḍa dPal gyi lhun po sogs kyis Phang thang ka ba med pa'i gtsug lag khang na bzhugs pa'i gsung rab rnams la mtsan dang bam grangs le'u shlo ka rnams zhib par gtan la phab ste them byang bkod par dkar chag 'Phang thang ma zhes bka' 'gyur phogs gcig tu sgril ba'i thog ma yin 'ga' zhig 'di las lDan dkar ma snga bar bzhed pa'i lung kyang yod de rjes Ka ba dPal brtsegs dang 'Khon Klu'i dbang po sogs kyis Stong thang lDan dkar na bzhugs pa'i gsung rab rnams bsgrigs nas dKar chag lDan dkar ma mdzad /（NKK, 24a). 芳村 1974, pp.109-111 参照。

(52) cf.Vostrikov, 1970, p.205；原田 1982, pp.610, 616 注 15。

(53) 『デンカル目録』の成立年代に関しては、「辰'Brug」年をめぐって諸説が出されてきた。かつては Tucci の 812 年説（Tucci, 1958）が支持されたが、最近では 824 年説（芳村 1974、山口 1978, 1985）が主流のようであり、異論として 836 年説（原田 1982、羽田野 1983）も主張される。

(54) 山口 1978, p.20 参照。

(55) 山口 1985, p.13 によれば、『プトン目録』に転載された『パンタンマ』の KP.827（= NS.2933）をランダルマ（Glang dar ma）王の著作と見なし、それを根拠に、『パンタンマ』の成立はこの王の在位（841–842）以後になると説を改めている。

(56) 上注 55 の見解に従えば、『パンタンマ』は 842 年以後の成立となる。

NII-Electronic Library Service